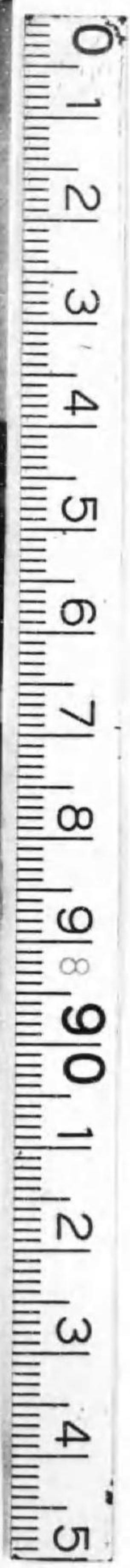


郷土の勤家

特 219
766
〇 複写

編會育教縣阜岐



始



特219
766



岐阜縣教育會編

勤
皇
家





序

本書は美濃飛驒兩國の内に生れ、又はこの郷土に於いて、著しい活躍をした勤皇家の事蹟を、國民學校初等科上級を標準とし、簡易に記述し兒童生徒の讀物として編した。而して勤皇の勳功を樹て、又は尊皇の精神に厚かつた郷土の偉人傑士は必ずしもこゝに擧げた人々に限る譯でないが、先づ其の最も世に著れてゐる數者について記述した。更に本書に次いで尊皇愛國の至情に富み、文化風教に貢献した先覺者、又は殖産興業等に盡瘁した功勞者に關する事歴を編輯續刊する豫定である。

今や我が國は前古未曾有の國際變局に會し、聖戰既に五歲興廢を賭して、東亞共榮圈の確立、亞細亞民族の興隆に向つて躍進をつゞけてゐる。この歴史的大使命を達成するには前途尙幾多の難關を突破せねばならぬ。戰線に在つては言はずもがな、銃後にあつても、私を忘れ職分に應じて奉公の至誠を抽んでゐる我等國民は、決して先人に劣らぬ覺悟を有つてゐる。殊に身命を戰場に殞して靖國神社に祀られる英靈の功績に對しては國民等しく感激崇敬措かざるところである。

されば本會に於て曩に本書編纂と共に、今次事變に關する偉勳大功を顯彰するため、忠勇列傳を編する計畫であつたが、種々の事情を顧慮して、他日支障なき機會を待つて刊行することにしてゐる。

本書を讀む者、一層先人の功烈を仰ぎ今昔に感奮してますます忠誠を勵み臣道實踐に邁進するの志を鞏くされるならば、編者の欣幸これに過ぐることはない。

本書各篇はそれ／＼實地教育の任に當られてゐる諸氏に執筆を依頼したものである。茲に筆者並に挿書を提供された諸賢に對して、厚く謝意を表する次第である。

昭和十六年四月三十日

岐阜縣教育會主事 阿部榮之助

郷土の勤皇家目次

- 一、土岐頼兼 多治見國長……………一
- 二、織 田 信 長……………一〇
- 三、田 中 大 秀……………二一
- 四、梁川星巖と妻紅蘭……………二九
- 五、座 田 維 貞……………四四
- 六、所 郁 太 郎……………五一
- 七、西山謙之助……………六一
- 八、小 原 鐵 心……………六九

郷土の勤皇家

一、土岐頼兼、多治見國長

(一)

源氏の大將源頼朝が後鳥羽天皇の御代、鎌倉に幕府を創はじめめ武家政治の基を開いたのは今からおよそ七百五十餘年の昔である。源氏將軍は僅か三代で亡んだが、そのあとは北條氏が執しつせん權として天下を治めた。

後醍醐天皇が御位におつきになつた頃、鎌倉の執權は北條高時であつた。高時は性質がおろかで、晝夜の別なく酒宴にふけつたり、田樂でんがくといふ踊を好み、また全國からたくさんさんの犬を集めてその咬かみ合あふのを見物して遊びくらし、少しも政治に力を入れなかつた。そこで天下の人々の心は自然に幕府を離れ、武士のうちにさへそむく者があらはれるやうになつた。

後醍醐天皇は御生まれつき聰明そうめいであらせられ、學者を召してひろく學問をお修めになつた。そして御心を深く政治にお注ぎになり、早くから政權せいけんを朝廷にかへさせ、萬民を安んじようとお考へになつていらせられた。この高時の有様を御覽になつてその無道をお憤りおきどほになり、今こそ政權をかへさす時だとお考へになり、いよく幕府を倒さうと御決心になつた。しかし幕府は六波羅ろくはらに一族の者を置いて厳しく見張りをしてゐて、少しの油斷もなかつた。そこで天皇はひそかに日野資朝ひのすけともをおつかはしになつて、天下に勤皇の武士どもをお召しになつた。

(二)

その頃美濃國の豪族に土岐頼兼・多治見國長があつた。

土岐家は源氏の一族で、大江山の酒呑童子しゆてんどうじ征伐で有名な頼光を先祖としてゐる武勇の家筋である。頼光から四代目の光衡みつひらは頼朝から美濃國の守護に任せられ、土岐郡を居所として土岐郷やかたに館を構へ、土地の名にちなんで土岐氏を名乗つた。土岐家は立派な家柄だけに代々尊皇の志の厚い立派な人物があり、その勢は美濃國全體におよんだ。頼兼は

この土岐家に生まれた。多治見國長も土岐家の最も有力な一族で、代々多治見に住んでこの姓を名乗つてゐた。二人とも武勇のほまれが高く、その上勤皇の志の厚い人であつた。



土岐七郎頼兼真影

土岐頼兼

後醍醐天皇の勅をおうけした資朝すけちかたが、山伏姿に身をやつして、まづさきに訪ねたのは、この土岐頼兼・多治見國長の館であつた。勅命をうけたまはつた頼兼・國長はからだ中の血潮が一時にわき立つやうに感じた。そして感激に満ち、涙さへ浮べて、三人は堅く／＼手を握り合つて勤皇を誓つた。資朝を送つた二人は直ちに上京の仕

度に取りかゝつたが、上京といつても幕府の目を忍んでのこと、大勢の武士達を連れ

土岐頼兼 多治見國長

て行くことは出来ない。一族の者さへ別れ／＼になつて京都に入つたのは、正中元年秋九月の初めであつた。そして頼兼は一族の者と三條堀川の館に、國長は六條綾小路の館に入つた。

京都では六波羅の見張が厳しく、寄合つて相談することさへ容易ではなかつた。時々酒宴と見せかけたり、講義を聴くごみせかけたりして相談した。そのうちに土岐家からは一族の勇士達が次ぎ／＼と京都に集つて軍備も備つて來た。

九月二十三日。

この日は京都の祭禮中一番賑やかな北野神社の祭日である。いつも六波羅の武士達は皆北野へ出張して、役所には僅の者しか残つてゐない。これこそ兵を擧げるに最も都合のよい日である。頼兼・國長を始め同志の人々は心から事の成功するやう神々に祈つた。

しかし、この大事もふとしたことから六波羅の役人に知れてしまつた。

(三)

正中元年九月十九日。

六波羅探題北條範貞は山本九郎時綱・小串三郎左衛門尉範行を大將とし、各三千餘騎の兵をさづけて頼兼・國長の館を襲はせた。

三條堀川の館。

頼兼はいつものやうに鶏の聲に目を覺まし、體を清め神の御前に長い黙禱をさしげて居間に歸つた。武具の手入に疲れてまだ寢入つてゐる若者達のいびきは、何といふ力強い響であらう。二十三日のはたらきも思ひやられてたのもしい。外はしら／＼明けて來た。やがて鏡に向つて髪を結はうとした時、うしろのふすまがサツとあいて、鏡には六波羅の勇將山本九郎時綱の武者姿が寫つた。

「さては謀がもれた。」

と氣づいた頼兼は太刀を取るが早いか、ふすまを踏み破つて廣間へ飛出しざまに横拂ひに鋭く切りつけた。時綱も名を得た大將である。太刀先をそらして廣庭へ飛んでおりた。頼兼は幾度も鋭く切りつけたが、時綱は頼兼の疲れを待つて捕へようと、立ち向はずに逃げ廻つた。その時、門の外にゐた寄手の軍勢は二の木戸から踏み込んで、一度に

「いつ」と関の聲をあげた。

頼兼はもうこれまでと覺悟をきめた。

「長く戦つて、若し生捕られては一家一門の恥辱なごいふ私事ではない。おそれ多くも一天萬乗の大君にわざはひを及ぼし奉つては一大事。」

やにはにをざりかゝつて切りつけると見せ、時綱の逃げる隙に居間に入り、靜かに御所を伏拜んで腹十文字にかき切つた。一族の者達もよく戦つたが、衆寡敵せず、頼兼の後をおつてここごとく切腹した。

六條綾小路の館。

國長は騒々しい兵馬の物音に飛び起きて、すぐに鎧・兜に身を堅めた。家臣小笠原孫六がかけ出して中門へ出ると、車の輪の旗が一旒築地の上から見えた。

「六波羅からの打手だ、謀がもれたぞ、太刀の目貫の堪へるかぎり、切つてく切りまくれ。」

と呼ばはりながら孫六は、腹巻を付けるが早いか、二十四本の矢をさした胡録と繁藤の弓をひつさげて櫓にかけ上つた。

「やあ〜大勢參つたな、今こそ我等の手柄をたてる時が來た。大將は誰か、近づいて一矢うけて見よ。」

と、十二束三伏の矢をつがへ、満月のやうに引きしぼつてひようと放つた。矢は眞先に進んだ騎馬武者の兜をまつかうから射通したので、武者は馬からまつさかさまにござと落ちた。これを手始めとしてまたく間に二十四人を射殺したが、矢だねもつきたから、もうこれまでと刀を口にくはへて飛び下り、花々しい最後をとげた。

國長はこの間に一族二十餘人と大庭におり立ち門を閉ぢて待つてゐた。寄手は國長が強い大將であることを知つてゐるので、恐れて近づかない。そのうち門のとびらの破れ目からくゞり入らうとした四人があつたが、たちどころに切られてしまつた。この勢に恐れていよく近づく者がない。國長は門をあけて、

「討手を承つた程の者が、なんと臆病ではないか、此處へ攻込め、國長の首さし上げよう。」

と罵つた。大將範行は怒つて、五百餘人に馬を乗捨て攻込ませたが、二十餘人のために、さんざん切り立てられ、たちまち門の外へ追出された。けれども寄手は大勢である。

すぐに新手が寄せて来た。かけ入れれば追出し、追出せばかけ入る。晝頃まで火の出る程



はげしく戦ひ、三百餘人を斬伏せたが、いまはこれまでど皆刺しちがへて果てた。

(四)

あゝ土岐頼兼・多治見國長はつひにたふれた。後醍醐天皇をたすけ奉り、正しい日本の國の姿にかへさうとした中途、二人の志はをしくも成らなかつた。けれども二人の働はやがて楠木・新田・菊池等勤皇の人々をふるひ立たせ、間もなく建武中興の業は成つたのである。實に土岐頼兼・多治見國長こそ武人勤皇の魁さきがけであり、皇政復古の大本を培つちかつた忠臣である。

頼兼の居城鶴ヶ城の趾あとは土岐郡土岐町に在り、國長の館趾は多治見町字木の本に残つてゐて、今なほ昔の面影をしのばせる。

かしこくも明治天皇は二人の忠義を嘉よみせられ、明治三十八年十一月十八日正四位を追贈ぞうあらせられた。

歲月は流れてこゝに六百年、忠誠の譽は年と共にいよくかんばしい。

二、織田信長

(一)

私たちの郷土「岐阜」の名はいつ頃からあつたものか、又誰がつけたものだらうか。室町時代の末、花の都を焼野ヶ原にして前後十一年も戦つた應仁の亂が、いつとはなしに終つた頃には、もう日本中がいはゆる戦國時代となつてゐた。各地に據つてゐた群雄は、互に相争ひ、弱肉強食、下剋上(家來が自分の主人に叛きその勢をうばうこと)、まことに手のつけられない有様となつてしまつたのである。

これが凡そ百年もの間續いたのだから、おそれ多いことながら、皇室に於かせられては、御料所さへもいつの間にか誰かが横領してしまつて貢も奉らないために、今日私たちが御想像申上げる事も出来ない程御不自由であらせられた。御所の築地が破れても、御修理申上げる者もなく、賢所(かしくところ)大前(おたまへ)のみあかしが遠く三條の橋から、あか／＼とをがまれたといふことである。

これではいけない、早く誰か天下を統一して、上の御心を安んじ奉り、又萬民の苦しみを救はなければならない。かうした氣運が各地の諸雄の間にも自然に起つて來た。

この時、この機に乗じて起ち、天下統一の難事業をほゞ成しとげたのみならず、とりわけ皇室を尊んで忠勤をはげんだ英雄があらはれた。これが即ち、わが「岐阜」の名付け親、織田信長である。

(二)

信長は尾張國古渡城(ふるわたりにやう)で、織田信秀の二男として戦國時代のたゞ中に生れた。後になつて天下を統一する程の者であつたから、少年時代から普通の子供とは、ずば抜けてちがつてゐた。

十二三歳の頃のことである。

今日も信長は五六人のお供をつれて、城下の市場(いちば)へ出て來た。

「あゝ若様だ。」

「若様のお通りだ。」

「まあ、あのかくかうをござらん。」
市に集つた男女の群が、口々にさしやきながら見送つてゐる。



織田信長

十二三とは思へぬ程せいの高い信長が、髪を茶釜ちんせんにゆつて、その根を赤や緑のひもできり／＼と巻き立て、大きな模様を染めぬいた着物に半袴をつけ、太いなはおびをしめた腰には、火うち袋や小さなへうたんなどを五つも六つもぶらさげ、引きづるやうな大刀をさしお供の肩によりかゝつて、柿をがりがりかぢりながら歩いて行く。

「やあ若様はばか様だ。」
なごゝ子供たちまでがかげ口をきく。

「あれが信秀様のおあとつぎとは情ないことじや。今に信秀様がおなくなりにもなれば、この尾張の國も遠江とほとうみの今川か、美濃の齋藤さいとうにとられてしまふにちがひない。」
と城下ではもつばらの評判ひやうばんである。

しかし、一たび武藝の事となると非常に熱心で、劔術、槍術やりは言ふに及ばず、その頃の新兵器であつた鐵砲から、馬術・水練・兵法に至るまで一心にけいこした。殊に馬術や水練はなか／＼得意であつた。

十六歳の時、父信秀はふとした病氣がもとでつひになくなつた。その葬式の日である。大勢の僧侶が續經ぞきやうの最中、信長はふだん着のまゝで式場へ出て来た。いよ／＼お焼香の場になると、つか／＼と前へ進み、じつと位牌いはいを見つめて立つてゐたが、やにはに香をつかむと、ぱつと投げかけて、人々があつけにとられてゐる中を、さつさと歸つてしまつた。

こんな有様だから、お守役であつた家臣平手政秀の苦勞は一通りではなかつた。何とかして立派な城主に育て上げたい一心から、幾度となくきつい諫言かんげんをしたが、信長はてんで耳に入れようともしない。亂暴はますます／＼つるばかり。思ひあまつた政秀は、遂

に最後の諫言を書きのこして、腹を切つて死んでしまつた。さすがの信長も、この事以來深く自分の非をさとり、行をあらため、領内をよくおさめて、漸く勢を西方にのばすべく準備してゐた。

(三)

永祿三年信長が二十七歳の年の五月である。一擧に尾張を合はせようと大軍をひきゐて攻め寄せた今川義元を、雷雨の夜に乗じて桶狭間おけはざまにおそひ、物の見事に討取つた信長の武名は一時に天下に鳴りひびいた。實にこの大勝は、やがて信長の天下統一の大事業のいそぐちを開いたものともいふべきであつた。

次いで信長は美濃攻略にとりかゝつた。

(四)

美濃國は代々守護職土岐氏の領地であつたが、その頃は土岐氏は亡びて齋藤氏さいとうがこれに代つてゐた。

信長の父信秀も、度々美濃へ兵を出したが、齋藤秀龍しやてんしゆりゆう・義龍父子よしたつは武勇に秀でた勇將であつたから、中々攻入ることは出来なかつたばかりか、或時などは、散々に打ち破られ、はふくのていで尾張へ逃げかへつた事さへあつた。

しかし、秀龍が戦死し、義龍もついで年若で死んだあとは、美濃の勢もだんく弱りはじめた。それは義龍の子龍興たつおきが父程の人物でなく、竹中半兵衛たけなかはんべゑ・稻葉一鐵いなばいつてつなど大切な家來も、だんく齋藤氏からはなれるやうになつたからである。

これを見てとつた信長は、時こそ來れど美濃攻略にとりかゝつた。

先づ犬山の近くにある小牧山こまきに移つて、こゝからしきりに兵を出して攻めたてたが、つひに永祿十年八月一日大軍をくり出して稻葉山いなばを圍んでしまつた。町を焼き、山を焼き息をもつかせず攻めたてたので、城兵もよく戦つたがつひにかなはず、十五日になつて龍興は城を開いて降参した。

かうして美濃はどうとう信長の手に入つたのである。

信長は直ちに小牧山から稻葉山城にうつつた。そして城下町じやうかまちであつた「井ノ口いのくち」を改めて「岐阜」とした。これは支那の昔殷いんの末國內がみだれた時、周の武王しゆうわうが岐山きさんから起

つて、つひに全土を統一したといふめでたい故事にちなんでつけられたもので、阜は山と同意義である。わが信長もこの地によつて天下を統一しようといふ心から、この佳名を選んだものであらう。「岐阜」の名は實にこの時にはじまつたのである。

(五)

信長の武名はいよ／＼高まつて、遂に時の帝、正親町天皇の御耳にまで達した。

かねてから皇室の御衰微をお歎きになり、何とかして天下の亂をしづめたいとお考へになつてゐた天皇は、信長の武名をきこしめすに、この年の十一月、立入頼隆を御使として岐阜におつかはしになつた。紅葉も大分散りはてた稻葉山のふもとの館で、信長はうや／＼しく御使を迎へ、謹んで勅命を拜した。

御勅書には、信長を武勇の長上、古今無雙の名將とおほめになり、御料所の回復・御所の修理等をお命じになる旨がしたゝめられてあつた。

もとより勤皇の心のあつかつた信長は、この有難い思召を拜して感激にたへず、御勅書をおしいたゞいて、いつまでもひれふしてゐたが、やがて靜かにあげた面には、誓つ

て天下を平定し一日も早く叡慮を安んじ奉らうとの固い決心の色が表はれてゐた。

京都へ、京都へ、信長の心ははやつた。

その頃室町幕府はすつかりおそろへて、名ばかりの將軍があつたが、十一代將軍義輝が、三好・松永等のために弑せられると、その弟義昭は京都を逃げ出し、遂に美濃に來て信長に助けを請うた。よい時が來た。信長はこれを西庄の立政寺(岐阜の西隣市橋村西庄の立政寺)に迎へ、厚くもてなした。そして、いよ／＼義昭にしたがつて京都に上らうと決心した。

永祿十一年九月七日三萬の兵をひきゐて岐阜を出發した信長は、行く／＼近江を平げて琵琶湖を渡り、大津から義昭と共に堂々と京都にはいつた、時に九月二十七日、岐阜を出發してからわづかに二十日、實に疾風のやうな早わざであつた。

信長は先にお受けした勅命にしたがつて、先づ、たくさんのお金を朝廷に奉つて當座の御用にあて、又御料所を横領してゐる地方の武士どもにきびしく命令して、これをお返し申し上げさせた。

義昭が將軍の職につくと、信長は一たん岐阜に歸つたが、又、三好・松永等がそむいたので、たゞちに上京してその亂を平げ、義昭のために二條城を築いた。これは大急ぎ

で行はれ、日々二萬人もの人夫を使ひ、信長自ら大刀をひつさげて工事場のまん中に立ち、仕事を急がせたので、さしもの大土木工事もたつた一ヶ月あまりで出来上り、たち幕府移轉の式を擧げた。

これと同時に、信長は荒損じてゐた御所の御修築を思ひ立つたが、この方は慎重に計畫し、奉行二人を命じて、昔の御しきたりにしたがひ、周到なる注意のもとに工事に取りがせられた。大工どもは、皆身を清め、烏帽子をいたゞき、淨衣を着けて、謹んで木をきり、板をけづつた。信長は更に奉行一人を増して三人とし、少しでも手落のないやうきびしく監督させて、やうやく三年の後、御修築が完成した。紫宸殿 清涼殿を始め奉り、幾むねもの御建物・御門・御垣根等にいたるまで見事に出来上つて、全く面目を一新した。天皇は殊の外御喜びあそばされ、

「まことに前代未聞の盛儀である。」
と、有難いお言葉をたまはつた。

信長はまた、皇室の御費用について新しい方法を定めた。それは、御料所を奉つても世の中が全くをさまるまでは、又ごんな不心得者がゐて横領するかも知れないといふ心

配があつたので、京都の町の人々に、たくさんのお金やお米を貸しつけ、その利息を毎日朝廷へおさめさせることにして、再び皇室の御料が足りないやうなことの決してないやうに取りはからつた。

この間、信長は各地の敵と戦ひつゝも、幾回となく岐阜・京都の間を往復して皇居御修築の監督をし、一方岐阜町の經營にも骨折つた。實に席のあたゝまる暇もなく活動したのである。

(六)

當時岐阜の町は人口一萬餘を數へ、にぎやかな商業地となつてゐた。

金華山の頂上には、三層の天守がそびえ、登り道の要所々々にはいくつもの櫓や木戸が設けられて、見るからに堅固な構であつた。

その麓、今の公園千疊敷附近には、大石を組合はせた塀をめぐらせて信長の館があつた。四階建の御殿を中心に、いくむねもの建物があつて、さら／＼と清水の流れるいくつもの美しい庭がめぐり、各種の室が完備した實に立派なものであつた。

尙、今の公園附近一帯は、その頃武家の屋敷のあつたところで、今私達が散歩するあたりを、當時はいかめしい大小を横たへた武士が往來してゐたものである。

信長は永祿十年から、天正四年安土城にうつるまで、およそ十年の間此所にゐた。今は城も館も残つてゐないが、信長の文書などは所々に残つてゐて、その昔をしのぶことが出来る。殊に長良の崇福寺には信長の墓と最も古い位牌をおさめた廟とがあり、いろいろ残されたものもあつて、參詣する者は拜觀することが出来る。

思ふに、岐阜の地における信長の、最も大きな事蹟は、勤皇の一事である。戦國争亂の中に生まれながら、よく日本國民としての本分をわきまへ、力強くこれを實踐して、忠勤をはげんだ信長の功績は、實に大なるものであつた。不幸光秀の叛逆にあひ、天下平定の一步前にたふれたことは、まことに惜しむべきことであるが、その勤は永久に朽ちないところである。

私たち岐阜の地に住むものは岐阜縣といひ、岐阜市といひ、「岐阜」の名のあるところ、郷土の英雄織田信長の勤皇をおもひ、いよく奉公の誠をいたすやう心がけねばならない。

三、田中大秀

(一)

田中大秀は飛驒國高山の人である。幼名は彌次郎と云つたが、兄の死後その家をついで彌兵衛と云ひ、大秀と改めたのは二十五歳の時であつた。

家は藥種屋をいそんでゐたが、小さい時から學問が好きで、

「あの本きちがひの藥屋の子よ。」

と近所の人に言はれる程、書物を手から離さなかつた。十歳の頃、百人一首や、古今集などの歌をすらくと暗誦出来たといふことでも、その勉強ぶりがうかゞはれる。

和歌を読むことが好きであつた彼は、作ることも上手であつた。二十一・二歳の頃には彼を教へた先生をしのぐ程のりつばな歌を作つた。

しかし、彼はたゞの「歌よみ」では満足することが出来なかつた。

その頃、我が國の一部には、日本人の踐むべきまことの道は、「古い日本の歴史や日本

精神を研究してこそわかるのだ。支那の學問ばかりしてゐるのはちがつてゐる。」と考へる學者たちがあらはれて、日本についての學問、即ち國學とよばれるものが盛んにな



田中大秀

を讀んだ大秀は日本の古い道、正しいすがたを知り、「この人こそ、私の先生だ。」

り、日本人としての考へ方や、日本の國の正しい姿が次第に研究され、敬神崇祖・尊皇愛國といふことがわかりかけて來たのである。

本居宣長が古事記傳や其の他種々の書物を著して、國學の大家と敬はれたのもこの頃であつた。そして宣長の著書

と、ひとり心に思ひ定めるやうになつた。

彼がたゞの歌人で満足できないと考へるやうになつたのは、その頃の時勢の力も大きかつたのである。

(二)

享和元年四月のはじめ、遂に大秀は高山を出發して、はるく伊勢の松坂に「鈴屋翁」をたづねた。弟子にならうとするのである。

折あしくその頃宣長は京都へ行つて、家には先生の子大平しか居なかつた。

大秀はたうわくした。しかし大平が、彼の決心の堅いのと、志の深いのに感じて、父へあてた紹介狀を書き與へ、京都へ向かはせた。

かうして大秀の願がかなつて鈴屋翁の門人となつた。二十五歳の時である。

彼が京都で宣長の教をうけたのは、わづか二ヶ月であつたが、その間一日も休まず講義を聞き、夜もねない程のはげしい勉強をつづけた。そしてこの短い間に、師の考へを

のみこみ、自分の進むべき道をささる事が出来た。

宣長の許を去つて三月の後、先生が亡くなつたといふ不幸な知らせを聞いた。悲しかつたことであらう。それからは、わからぬことをば手紙で大平にたづねたが、再び松坂へ行つて先生の書き残した書物を讀んだり、うつしたりして、益々その學問を深めた。宣長には澤山の門弟があつたが、その中でも大秀はすぐれた一人に數へられるやうになつたのも、この熱心な勉強をつゞけたからである。

大平は大秀を「學びの兄弟」と言つて敬つた。そして大秀の書いた軸を床の間にかけてゐたといふ。ある時、大平の家をたづねて來た一人の客が、この軸を見て、「大秀。」

と呼びすてにしたのを、大平が聞きこがめ、

「あなたは何たることを言はれるのだ。それを如何なる人と思ふのか。それはたゞの飛驒人ではない。實に日本の大先覺者田中大秀先生なのだ。口をすゝいで改めて先生にわびるがよい。」

と、言葉きびしく云ひきかせたといふことである。

(三)

其の後、大秀は家の子にゆづり、郷里高山の近くの江名子村に住んで、ひたすら國學の研究や、敬神尊皇の精神をひろめみちびくことに力をつくした。そして數多の書物を著はし、又諸所の舊跡に石碑を建てたが、それは皆世人に日本の古い、正しいすがたを知らせようといふ考へからである。

そこで彼が、更に骨折つたことは、神社の復興である。それは人々の間に神社を敬ぶ心が起り、神社のこのごに力を入れるやうになつてこそ、日本の道が明かになると考へたからである。その頃は古い由緒のある神社でも荒れはてし、狐や狸の住むにまかせ、社の位置や境内さへ不明のものすらあつた。

彼は先づ自分の住む村の荏名神社の荒れてゐるのを建てなほさうと思ひ立ち、自分の書や書を賣つて費用を集め、りつぱに再建し、後にその神官をつとめた。又飛驒國內の

古い神社十八社と飛驒國造大八椅命とを合祀して新に飛驒總社を建てた。この神々はいづれも國土開拓の功をたてられたお方である。

更にこればかりでなく、最も大きい尊皇の功績は、繼體天皇の御世系を明かにし奉つたことである。

第五十九代繼體天皇は御即位の前、長い間母方の越前においてになつた。その御遺蹟や御仁慈の數々はその地方の人々に語りつたへられてゐた。しかし、畏多くも應神天皇五世の王子であらせられることが知れてゐたが、御世繼の次第は古い書物にもはつきりして居らなかつたのである。大秀はこの事のあまりの勿體なさに、せひとも天皇の御世系を明かにせねばならないと決心した。

そして、古い書物を幾通りも調べた末、はじめて正しく御系統を確かめ知ることが出来た。よつて皇居の名に因んで「玉穗宮考」と名づけ、ひろく世に發表した。ついでこの考證と、天皇を稱へ奉つた和歌二首とを碑石にきざんで、天皇をお祀り申してある越前福井の足羽神社に建て、多くの人々に知らせるやうにつとめた。これは實に我が皇室

の尊くも嚴かなることを明かにしたもので、大秀のたふとい功績と言はねばならない。

いつも皇室のありがたさを忘れることのなかつた大秀は或る夜、夢に、畏多くも御前に召され、それから御後に従ひ奉つて御所の大庭を拜觀し、ありがたい大御言さへ承はつた。あゝこのかたじけなさ、玉敷の御庭……と歌詞が思ひ浮んだまゝ、夢がさめた。大御供仕へ奉りて玉敷の

御庭に遊ぶ今日のかしこさ

これがそのときの感激を詠んだ歌であるといふ。

まことに大秀の尊皇心は、夢にも皇室を忘れることのない程厚かつたのである。

(四)

かうした彼をしたつて、その教を受けようと大勢の弟子が集つた。山崎弘泰・富田禮彦などもその一人であつた。かくて次第に敬神尊皇の考へが、長い間幕府の直轄地であつた飛驒の人々の中にもめばえて行つた。

又越前には五十人ちかくの門弟があつて、中にも橘曙覧のやうな特に名高いすぐれた歌人もあらはれた。

弘化四年、越前の弟子たちに招かれて福井へ行き、講義の途中に病にかゝり、郷里に歸つて間もなく亡くなつた。歳七十一であつた。

大正四年十一月十日 大正天皇は大秀の功績を思召されて、特に正五位を贈らせ給うた。

四、梁川星巖と妻紅蘭

(一)

梁川星巖は徳川幕府の力もやうやく衰への見えはじめた寛政元年の六月に、大垣に近い今の中川村曾根に生まれた。

幼い頃から非常に落着いた性質で、村の子供たちが棒切れをふりながらおせ道の蛙を追ひまはしてゐる時、村の華溪寺の一室で、太隨和尚についてむづかしい書物や習字を勉強してゐた。まだ七つだといふのに、本をかへてうれしさうに寺の門へ急ぐ星巖の姿を見送つて、父の長高は、

「あの子は、せひ江戸へ出して學問をさせたい。」とひそかに心の中で思つてゐた。そして夜になると、昔からのすぐれた忠臣義士の話をして聞かせた。星巖は、こぶしを握り目を輝かせ、夜の更けるのも忘れるくらゐであつた。

けれども、この静かな恵まれた日は長く續かなかつた。父と母が、わづか四月をへだてた同じ年のうちに、急に死んでしまつたのである。時

に星巖は十二歳、どんなにか歎き悲しんだことであらう。忽ち孤兒となつた星巖は、悲しみのあまり御飯ごはんもろく／＼喉のどへ通らぬくらゐだつたといふ。幸ひ、家には財産があつたので暮しには困らなかつたが、この大きな不幸は、星巖の心に深い影響えいさうをあたへたの

致右星巖君大嘗會御事下
遊高坐殿月賦以五上様子
操多非儀武子北枝仲然登終
興辨難及果夫飲小飲大飲方飲
何者外本自洋全一節二處存
予死空庫三教開口正落言詮
星巖君遺稿
星巖君遺稿



梁川星巖

であつた。

寛政といへば、今まで長く太平の夢をたのしんでゐた日本が、北から南から、新しい國々のたゞく警鐘けいしょうに、やうやく驚きの目を見張りはじめた頃である。その三年には、林

子平が海防のことを心配して「海國兵談」を著した。その翌年には、果してロシアの船が蝦夷えぞ嶋へやつて來た。間宮林藏が、非常な苦心をして樺太を探検したのもこの頃である。星巖が二十歳の文化五年には、イギリスの船がはや長崎へ來た。わが國の騒ぎはいよ／＼大きくなつて來た。

それであるのに、日本の國の中はさうであらう。幕府は、たゞ騒いだり心配したりするだけで、「この日本の國をさうして行くのか。」といふ大事なことがわかつてゐない。しかし「今こそ、天皇御親政の正しい日本の姿にかへり、國民が一體となつて外にむかつて行かなければならない。」と言ふ正しい考へ方が、しづかではあるが國中に漲みなぎりはじめてゐて、草深い田舎へも、この目に見えぬ波は少しづつ、打寄せてゐた。

星巖は、新しく世が動かうとするこの時、このまゝ田舎で朽ちてしまふのが残念でたまらなかつた。十五歳の時に、「苟いやくも男子と生まれて、さうして、碌々ろくろくとして郷土で老死することができようか。」と人に語つてゐたといふ。はげしい動きの中に身を投入れて、思ふぞんぶん自分を鍛へたいと思つた。それでこそ、男子としての生まれがひがあるのだと信じた。

とう／＼十九歳の時、全部の財産を弟にゆづり、燃えるやうな志を抱いて江戸へ出た。

(二)

江戸では、その頃最も評判の高かつた山本北山ほくざんを先生として、漢學や詩文を勉強した。星巖の詩を作る才能は早くも世にあらはれ、「今にすばらしい詩人になるぞ。」とうはさされた。故郷の太隨和尚もしば／＼手紙を送つて、まじめに勉強するやうにと親のやうな心で勵ました。

彼が三十五・六歳の頃、詩人星巖の名はもう全國に知れわたるやうになつたのである。星巖は旅が好きで、月や花にあこがれては全國を訪ね歩いた。そして美しい數々の詩を作ると共に、又多くのりつばな友人を持つことが出来た。中でも、彼が一番心を許し合つたのは、あの「日本外史」を書いた頼山陽であつた。頭の毛もぼう／＼として、なりふりを一かうかまはない山陽と、衣服をきちんとして身につけ禮儀正しい星巖とは、一見反對の性質のやうにも思はれたが、語り合ふにつれて二人の心はますます／＼深く結ばれ

た。星巖が文章のことを山陽に相談すれば、山陽もまた自分の詩を見せて星巖の教を受けるといふありさまで、「文の山陽、詩の星巖」と二人はならび稱せられた。その頃の詩人廣瀬淡窓たんそうといふ人が書いた本の中に、

「今、山陽・星巖の名、天下を風動し、人その面を見てその言を聞くを得るを以て榮とす。」

とあるほどであつた。しかも、二人の話はたゞ詩文の上のみでなく、話がたま／＼國家のことになると、皇室の御衰微、幕府のわがま／＼に對して、共にはげしく歎きいきどほり合ふのであつた。

天保三年、山陽は京都で重い病にかゝつた。驚いて駆けつけた星巖が、あつく山陽を見舞ひ、さて江戸へ行かうとして天龍川を渡つた時、山陽の死を傳へ聞いた。「病がなほつたら、二人で江戸へ行かうと約束してゐたのに……。」と星巖はあまりのことに聲をあげて泣いた。涙のうちに、死を惜しむ詩三首を作つて、偉大な親友の靈にさへげた。

(三)

その後星巖は、江戸に於て「玉池吟社」といふ詩の會をつくつた。先に故郷にゐた時にも、柴山老山・村瀬藤城・江馬細香などの人々に星巖の妻紅蘭も加はつて「白鷗社」といふ會をつくり、大垣の實相寺に寄り集つて詩文を研究したこともあつた。星巖の人格にひきつけられるのか、彼のそばへは蟻の甘きにつくやうに常に多くの人々が集つて來るのである。この頃の星巖はもう押しも押されぬりつばな大家で、人々は次から次へと彼の門をたゝいた。幕末から明治にかけての有名な詩人は、ほとんど皆彼の門から出たのである。長い間さすらひの旅を續けてゐた星巖も、やうやくこゝに落着き、わりあひに安らかな生活が始められたのであつた。

しかし、星巖は心からたのしまなかつた。

名聲を得ることよりも、すぐれた詩を作ることよりも、この時代に於てしなければならぬものつと大きな仕事があることを彼ははつきりと感じてゐた。それは、抑へても抑へ切れない憂國の熱情である。阿片戦争のため支那が英國に打負かされたことももちろゑん知つてゐた。英國のこの次の餌食がどこに求められるかを考へる時、たゞ阿片戦争の詩を作つてゐてよいのであらうか。何よりも大切なことは、先づ日本を正しい姿にかへ

して、一致協力、外敵にあたることではないか。この國を憂ふる熱情は、歳を重ねるごとに、いよ／＼燃えさかかつて行つた。

五十七歳の時、盛大な「玉池吟社」を急に閉ぢて、故郷に歸ることを決心した。人々が不思議に思つてそのわけを聞いても、いゝかげんのいひわけをしてゐるだけで、本當の心は誰にもあかさなかつた。しかし、深く心を許し合つてゐた佐久間象山は星巖の心を知つてか、

「世間の人々は目の前のことに心を奪はれて、前途がどうなるかを少しも知らない、けれども、ひとり星巖は知つてゐる。このむづかしい時代に、彼のみは正しく歩いてゐる。星巖は決してたゞの詩人ではない。」

といふ意味のことを述べて、彼の旅へのはなむけとした。まさしく、星巖の心をいひあてたことばではなからうか。

(四)

星巖は京都へ上つて、鴨川のほとりに家をかまへた。

表面は、香をたき詩を作り、學問や風流に身を任せてゐるやうに見せてゐたが、實際は、彼の宅が勤皇の志士の宿のやうになつてゐた。京都を過ぎる志士たちは、必ずといつてもよいくらゐ彼の宅を訪れて、意見を聞き、又いろ／＼の相談をした。彼は既に六十を越えた老人でありながら、二十臺や三十臺の青年たちと一しよになつて、はげしく國事を論じ合ひ、「どうしたら正しい國の姿に立ちかへるか。」と、政治的なはかりごとまでも心をくだいた。その頃幕府の方では、彼を梅田雲濱・頼三樹・池内陶所と合はせて、「尊皇攘夷の四天王。」と呼んで警戒してゐたが、中でも星巖はその首領だったのである。横井小楠・西郷隆盛もしば／＼彼を訪れてゐる。佐久間象山・吉田松陰は、星巖の手を通して、國事についての意見書を朝廷に奉つてゐる。老を忘れた星巖は、死ぬまでの十餘年間、このはげしい時代の中心人物として、縦横に活躍したのであつた。しかし、最後の日はつひに近づいた。

アメリカの使節ペリーのために開港を迫られた幕府は、安政五年とう／＼朝廷のお許しのないのに勝手に開港の條約を結んでしまつた。それでなくても幕府のやり方をいきどほつてゐた人々は、火のやうになつて幕府のわがま／＼なふるまひを責め立てた。この

上は、「外國船を打攘へ。」との勅命をいたゞくより外はないだらうと、志士たちは考へた。

そのためには、かういふ考へ方に、先づ公卿たちの心を動かさねばならなかつた。星巖は雲濱・三樹・陶所等の同志と相談して、このことのために、日夜心をくだいた。この頃、三樹から星巖にあてた手紙の中に、

「かねて打合せたことを公卿方に申し上げましたが、なか／＼思ふやうにいきません、ひとり近衛公だけは、よほど御熱心に私の意見をお聞き入れ下さつたやうですから、あなたからお教へにあづかつてゐたあの計畫を、この公にこそ打明けようと思ひ、その夜病をこらへて夜更けまで密談しました。」

といふ意味のことばがある。表にこそ立たなかつたが、そのかげに於て、星巖がどんなに苦心してゐたかゞあり／＼さうかゞはれる。

つひに勅命は下つた。幕府のもがきは一そうはげしくなつて來た。とう／＼その年の八月、老中間部詮勝が大老井伊直弼の命を受けて京都へ上つて來ることになつた。「さては、いよく朝廷を苦しめ奉るのか。」と京都にゐる志士たちは非常に心配した。

このなりゆきを見てゐた星巖は、今こそ自分が奮起しなければならぬ時だと思つた。「幸ひ、自分は老中間部といくぶん知り合ひだ。この上は直接間部に會つて、彼の間違つてゐる所をはつきり示して、日本人としての正しい生き方へ導いてやらう。」と決心した。國を憂ふる詩を二十三首も用意した。「七十の全生涯を今度の會見に傾けつくして、間部を説き伏せよう、そして日本の國の夜明けを一日でも早めねばならぬ。そのために、若し自分の命がなくなつたとしても、何の悔いるところがあらう。」と、悲壯な決心に身をかためた星巖は、ひたすら間部の上京を待ち受けてゐた。

しかし、不幸にも星巖は、この生涯の役目を果す日を間近にひかへた九月二日、その頃流行の病にかゝつて急死したのである。

病あつしと聞いて駈けつけた門人たちが、良い醫者を迎へようとしても、「われ歳七十歳豈又餘命を貪らんや。」といつて聞かない。いよく死期の近づくのを知ると、「男子、婦女の手に死せず。」といつて妻紅蘭を別室へ退け、正坐したまゝ、息をひきとつたといふ。いかにも意氣盛んな志士星巖にふさはしい最期であつた。

星巖が死んでから六日目に、梅田雲濱・頼三樹等の志士がことごとく捕へられた。或

は斬られ、或は流され、世にも悲惨な「安政の大獄」がこれからくりひろげられたのである。若し星巖が生きてゐたとすれば、志士の首領としてもちろん眞先に斬られたに違ひない。口うるさい京都の人々が「星巖は死に上手（詩に上手）」といったといふが、大獄をまぬがれて死んだことは、果して彼の本望であつたであらうか。

一世の大詩人であり、大勤皇家であつた星巖は、變化の多かつた七十の生涯を、このあわたゞしい動きの最中に閉ぢたのである。

明治二十四年四月、明治天皇は星巖の生前の功勞をおぼしめされ正四位を追贈したまひ、次いで靖國神社に合祀せられた。

(五)

星巖の病死を聞いた幕府方は非常に残念がつた。彼を捕へていろくど白状させれば勤皇方の動きが手にとるやうにわかると思つてゐたからである。そこでつひに、彼の妻紅蘭を町奉行所へ引立てた。

白洲に引出された紅蘭が第一に聞かされたことは、果して、「お前は星巖のそばに何

梁川紅蘭世に夫星巖の
配たるに恥らす常に筆
に親しく詩作を伴ふ



紅 蘭 妻

時もゐたから、國事を相談した志士の名前を知つてゐるに違ひない。かくし立てするを爲にならぬぞ。」との、きびしいしらべであつた。

紅蘭は少しも臆するところがなく、かへつて奉行をたしなめるやうな口調で言ひ放つた。

「あなたは國家の大事をも妻に御相談なさいますか、もとより、そんなことはしません。星巖は男子です。何で女の私に一々相談いたしませう。たとへ若し、私にもらし

たとしても、私は亡き星巖の妻として、死んでも大事な秘密は申しません。」
りんとして姿を崩さない紅蘭の態度を見てゐるうちに、奉行も彼女の心を動かすこと
のむづかしいのを悟つた。そして今度はやさしく、

「お前はこれから長く囚はれの身となるだらうから、家のことがいろいろ心配になる
だらう。若しお前の家に寶とするやうな大切なものがあつたら、こちらの方で護つて
やるから遠慮せずに申して見よ。」

と、ことば巧みに秘密を探り出さうとした。もとより、そんな手に乗る紅蘭ではなかつ
た。

「私の家に馴れた鳩が一羽ありますが、私がゐなくては飢ゑて死ぬかも知れません、どう
か、私にかはつて鳩のめんどうを見てやつて下さい。」

奉行は苦笑しながら、それでもそのことばに従ふより外はなかつた。

星巖の妻にふさはしい、まことにしつかりした氣性の人であつた。しかし、夫に對し
ては心のやさしい妻でもあつた。

紅蘭が星巖のところへ嫁いだのは十七であつたが、結婚後しばらくして、星巖は思ひ

出したやうに、

「今からちよつと旅をして来る、三月ほどたつたら歸つて来るつもりだ、それまでに、この三體詩を暗誦できるやうにしておけ。」

と、一冊の本を彼女の手に残したまゝ、漂然と家を出て行つた。夫は詩人であるから、少しはかほつたところもあるだらうと思ひ、その日から留守を守りつゞけ、裁縫や機織の暇ごとに、夫からいひつかつた三體詩を出して熱心に勉強してゐた。もつと漢學の力も充分にあり、後には夫星巖と共に多くの詩を作つたほどの紅蘭であるから、まもなくその全部を暗誦してしまつて、今は夫の歸りを待つのみとなつた。

ところが星巖は、約束の三月たつても歸つて來ない。どこにどうしてゐるのか、手紙一つ送つてくれない、紅蘭はもとより、一家親類の者までがどうしたのだらうと案じてゐるうちに、一年たち、二年も過ぎた。あまりのことに紅蘭の親は、娘にうちへ歸れとすゝめたが、紅蘭はきかなかつた。「自分は一旦星巖に嫁いだ身である、たとへどのやうな苦しいことがあらうとも、勝手にこの家を去るのは女の道ではない。」と深く心にきめてゐたのである。

三年目の春が訪れはじめた頃、星巖はぶらりと家に歸つて來た。旅の好きな星巖は、あすこの花、こゝの月と、それからそれと風流の旅をつゞけて、つい歲月の流れるのも心づかず三年の月日を送つてしまつたのであつた。それでも、家を出る時申しつけおいたことは忘れなかつたとみえて、家に歸るとすぐ、

「三體詩は讀めたか。」

と問ひたゞし、妻が即座にすら／＼と暗誦すると、始めてうれしさうに旅の衣をぬいだといふ。

その後の紅蘭は、夫と共に旅をつゞけ、共に詩を作り、共に詩を語り合ひ、幸福な日々を送つた。星巖のあのはげしい働きの裏には、紅蘭の内助の功があつたことはいふまでもない。

星巖の死後、紅蘭の身の上にいる／＼の苦しみが加はつて來たが、男勝りの彼女はあだかも霜にひるまぬ寒菊のやうに強く清く生きながらへた。そして明治十二年三月、七十六歳にして世を去つた。

大正十三年二月十一日、特旨を以て従五位を追贈せられた。

ることなく、詩を作つて涙ながらに君恩のかたじけなさをしのび奉つた道眞の眞心。

この話を聞く度毎に目を輝かせ、こぶしを握るのであつた。かうして學問が進むと共に、維貞の勤皇心はいよ／＼培はれて行つた。そして立派な學者となり、座田家をついで朝廷につかへるやうになると、その熱情はますます／＼燃えさかつて來た。

(二)

その頃日本の有様はどんなであつたらうか。

寛政四年にロシアの船が突然北海道の根室（ねむろ）に來た。「黒船來たる。」の警報は徳川三百年間の鎖國（さこく）泰平（たいへい）の夢を破り、今まで幕府の勢におさへられてゐた國民の愛國心は、時勢に目覺めた人達によつて呼び起され、國中は尊皇攘夷・佐幕開港の二論に別れて、沸き立つやうな騒々しさであつた。

しかし世の中の大勢の人々は、この騒ぎをよそにしてゐた。星巖の詩に、「この騒しい世に、少しも國家のことを考へず、酒を呑んでのんきに外國船が來たといふ流行歌を歌つてゐる者がある。」と歎きいきどほつてゐるのがあるが、心ない人々はまつたくこの詩

のどほりであつた。その上長い間幕府の政治になれて、日本の國體を知らず、皇室のおめぐみによつて生きてゐることさへ知らない有様であつた。又學者の中には、支那の學問をのみ學び、支那を尊んで日本をいやしい國のやうに考へてゐる者もあつた。

維貞はこの有様を見て、

「今の日本を正しい姿にかへすには、全國民に日本の尊い國體を知らせるより外に道はない。」

と信じた。天保六年つひに一冊の本を著して、

「世には孔子や孟子を尊ぶあまり、支那が大變偉い國であるやうに思つてゐる人々があるが、それは全くあやまりである。日本は支那と國の成立ちが異つてゐて、萬世一系の皇室を中心とする國柄で、皇室は天地と共に窮（きは）りなきものである。」

といふ意味のことを述べ、我が肇國（てうこく）の精神と君臣の大義とを明らかにした。そして其の内容にちなんで「國基（こくき）」と名づけた。

この本によつて、初めて我が國體の尊いわけがらを知り、皇室の有難さと日本に生まれた喜びとを感じた人々が、どんなにかたくさんあつたことだらう。

おそれ多くも、「國基」は孝明天皇の勅覽に入り、ありがたいおほめのお言葉をさへ賜つた。

唐大和道のけじめの手引草

つたなき文も御手にふれにき

の歌は維貞がこの感激を詠んだものである。

歳移つて明治四十二年、乃木大將は「國基こそ日本の國體を正しく説いた本である。」とて、これを印刷して大勢の知人たちに分ち與へられた。越えて四十四年には「國民思想叢書」の中に加へられ、今日に至るまで多くの人々に愛讀されてゐる。維貞の精神はこの「國基」によつて今なほ生きてゐて、國民を正しく導いてゐるのである。

(三)

維貞は國を憂ふるのあまり「國基」を著したが、唯それだけで満足してはゐなかつた。

「中頃から皇室の御稜威が衰へて、幕府がわがまゝな政治をするやうになつたのは、公

卿が無學で、天皇をおたすけすることが出来なかつたからである。それ故今一番大切なことは、新に學校を設けて、公卿の子弟を教育し、將來立派に天皇をおたすけ出来るやうにすることである。」

と考へて、このことを朝廷へ申し上げた。朝廷ではこれをお許しになつて、弘化五年始めて學習院が設けられた。そこで維貞は學習院の先生を命せられ、特に「徳を以て導くやうに」との有難い御言葉を賜つた。これから十餘年間、雨の日も風の日も一日として休む事なく、熱心に生徒達を教へた。きちんと身なりを整へ、毎日同じ時刻に校門をくぐる維貞の姿は深い雪の朝、強い嵐の夕、ともすると怠けようとする生徒達の心をどんなに引しめ奮ひ立たせたことであらうか。或時中風を病んで、ほとんど歩けないやうになつたことがあつたが、この時でさへ病を推して杖にすがりながら學校へ出たといふことである。いかに日本の將來について心配し、立派な人物を育てあげようと努力したかどうかははれる。

明治の元勳として大政をおたすけ申し上げた人達の中には、この學習院に於て維貞の教を受けた人が少くなかつた。其の後學習院は遷都と共に東京へ遷されたが、ますます

大切な學校となり、おそれ多くも皇族の方々もこゝでお學びになることゝなつた。

(四)

かうした維貞の胸中には、いつも清麿と道眞の精神が流れてゐた。

その頃清麿の墓は京都の榎尾とがせにあつたが、長い間手入れする人もなく、荒れに荒れて狐兔ことの住處すまひとなつてゐた。維貞はこの有様をなげき、自ら金を出して立派に修理した。嘉永四年三月孝明天皇が清麿の廟に正一位の神階をお授けになり、護王大明神の神號を賜はつたのも、維貞の建言けんげんにもとづくといふことである。

又道眞の遺訓であると傳へられる菅家遺誡くわんけいは、國民に對するよい誠であると考へて、これを印刷して世間に配り、更に「日本の學問は日本の國體を基としなければならぬ。」といふ意味の遺誡中の言葉を石に刻きざんで北野神社の境内に建てた。

維貞の生涯はかうして全く勤皇の精神をもつて貫かれてゐた。それで幕府は常にこれを警戒してゐたが、安政六年八月六十五歳でなくなつた。明治天皇は維貞の生前の功勞を思召され、明治四十五年二月特に正五位を追叙ついであらせられた。

六、所 郁 太 郎

(一)

嘉永五年三月の或日、心地よい陽ひざしの中を、道を加納へ急ぐ十五六歳の品のいゝ少年と、その父親らしい四十五六歳の男があつた。

藪屋かぶやの渡まで來ると、あいにく舟が出たばかりなので、二人は堤に腰を下して藪川やぶがはの清流をながめながら休んだ。川上からは次々とたくさんの段木つだが流れて來る。

少年は珍しさうにながめてゐたが、やがてたづねた。

「あの木はどこから流れて來るのでせうか。」

「あゝあれか、お前にはよくわかるまいが、この川上の根尾谷ねをだにから流してよこすのだ。

根尾山一帯は大垣藩の領地で、この段木はたいてい御家中ごかちゆうの燃料になるのだよ。」と教へたが、ふと思ひ出したやうに、

「さうだ、根尾谷といへば、うすすみの櫻といつて珍しい櫻のあるところだ。もう今頃

は花のまつ盛りであらう。この川の面には、その櫻の花びらが流れて来るかも知れぬ。」

といひながら、何か感慨深さうに川上をながめてゐたが、やがて元弘・建武の忠臣根尾入道のでがら話をして熱心にをしへた。少年は大きくうなづいて何か決心するものゝやうであつた。

間もなく舟に乗つた。藪川を渡ると數屋の村である。それから北方を通り長良川を越えて、加納の城下にはいつた。訪れたのは青木養軒といふ醫者の家である。この二人は誰あらう。揖斐郡西方村の人、後の勤皇家所郁太郎と其の父伊織である。

養軒は加納藩醫で、その頃世に知られた學者であつた。伊織は郷里で醫を業としてゐたが、郁太郎の將來に大きな望みをかけ、こゝに入門させることにしたのである。伊織と養軒とは、かねてよく知り合つてゐた仲なので、

「あゝよく來られた。あなたが郁太郎さんか、十五歳とは思へぬ立派な體格だ。もう漢學も一通り出来るとのこと、これからはわたしが引受けてきつと一人前のお醫者にしてあげよう。」

と養軒は喜んで迎へ入れた。

郁太郎の喜びは一通りでなかつた。これから燃えるやうな熱心な勉強が始まる。ものおぼえのよい評判の少年、その上人一倍勉強するので、學問はぐんぐん上達した。醫學はもとより、漢學も前よりずつとよく出来るやうになつた。養軒はわが子のやうにかはいがつて教へた。

(二)

世の中はまたしく間にすつかり變つた。

嘉永六年六月三日、思ひがけなくも、黒山のやうなアメリカ船が四隻浦賀にあらはれた。國民の驚きは大きかつた。

太平の眠をさます上喜撰(蒸氣船) たつた四杯(四隻) で夜もねられず
と歌はれたのは實にこの時である。

青年郁太郎の血はわき立つた。しかし郁太郎は、むやみにさわぎまはるやうなかるはずみなことは決してしなかつた。父の教をしかと胸にきざみつけて、尙も一心に學問に

はげんだ。

「自分は何としても、日本の名醫になるのだ、しかし、たゞの名醫といふだけでなく、日本の國になくなくてはならぬほどの大人物にならねばならぬ。」と大きな望みを常にいだいてゐる。

郁太郎はその頃の新しい學問をするために、或は京都に、或は北陸に、遠きをいとはず師を求めた。そして最後にその頃世に名高かつた大阪の緒方洪庵（おのゝかたこうあん）について學んだ。郁太郎が入門した時、洪庵は五十一歳、郁太郎は二十四歳、歳こそ違へもう初對面の時から深く知り合つた。

その頃緒方塾（じゆく）には「ゾーフ」のいふオランダ語の字引があつたが、外國の本を手に入れることがむづかしかつたその頃のことだから、實に貴重なものであつた。何時も三疊の間の机の上に大切に置いてあつて、「ゾーフの間」といひ、この室へ一々立つて行つて字を引いた。塾生は勉強がはげしかつたので、真夜中になつても此の間におしかける者が多く、この室だけは夜通し燈火が輝いてゐた。郁太郎はほとんど毎夜この「ゾーフ」の間に字引と首引して、夜の更けるのも忘れるほどであつた。

洪庵はこの青年を心からたのもしく思つた。

(三)

文久二年春、一時故郷に歸つた。

やがて草深い田舎に初夏がおどづれ、靜かな幾日かゞ續いた。しかし、これもつかの間であつた。かねて勤皇の心のあつた郁太郎はいよ／＼さわがしくなつて行く世の有様を見てひそかに決心し、つひになつかしの故郷を後にして京都に上つたのである。

かくて伏見街道のほとりに家を構へ一時醫を業とした。

世の中は刻々變つて行く。郁太郎はもうじつとして居られない。特にロシアの侵略（しんりやう）をうれへ、わざ／＼樺太まで出て大いに働かうとしたのはこの頃のことであるが、兩親の許しがないので、はやる心をおさへてゐた。とかくする間に、ふとしたことから長門藩（ながとはん）に召しかゝへられることになつた。

いよ／＼花々しい活動がはじまつた。郁太郎は先づ藩醫として河原町の藩邸前に新しく出來た「長州藩醫院」の總督となつた。今でいふ病院長である。時に年二十五歳。郁

太郎はもとよりたゞの醫者ではない。かね／＼蘭學を修めて、世界の事情をよく知つてゐる上に、勤皇の心のあつい人であるから、幕府が朝廷に對し奉り、さかくわがまゝな



所 都 太 郎

るふるまひをなし、外國との交りに卑怯ひきようであることなどをひごくいきどほり、折もあらばと、同志の人々とはかつて事をあげようとひそかに決心してゐた。

方なく、五月十日を期して攘夷を實行することにきめて、これを朝廷に申上げ、又諸大名にも知らせた。いきり立つた長門藩は、その日つひに外國船を下關で砲撃した。これ

文久三年四月、孝明天皇は

賀茂神社に行幸遊ばされて攘

夷をお祈りになり、尊皇攘夷

の氣勢はあがつた。幕府は仕

を手はじめに、外國船と見れば少しもようしやなく、砲撃するといふものすごい意氣ごみである。

ところが一方温和論をとなへる諸藩もあつて、朝廷の御評議がにわかになり、攘夷を決定した長門藩主等の入京はさしとめられてしまつた。燃えるやうな勤皇の心をいただきつゝも、郁太郎等は涙をのんで長州へ落ちて行つた。

長州へはいつた郁太郎は、その人物がみとめられてか、一躍遊撃隊參謀といふ高い役目をいひつけられた。彼は感激した。當時長門藩には勇ましい、いくつかの隊があり、中でも遊撃隊は高杉晋作を隊長とする奇兵隊に次いで強く、郁太郎が參謀となるとその勢はますます盛になつた。

間もなく長門藩士は勢をそろへて無實の罪を訴へようと京都へおし上つた。薩摩・會津の藩兵とそこ／＼ではげしい戦が始まつた。郁太郎も家老國司信濃の參謀として勇ましく戦つたが、つひにやぶれて再び長門に落ちのびねばならなかつた。

(四)

これより先、外國の様子をくはしく調べて歸つた長門藩士井上聞多ぶんたは、藩の者に世界の
大勢を告げて熱心に開港論を説いたが、特に攘夷論の盛な同藩の人々には、もごより
聞き入れられるはずもなく、てきびしい反對をうけた。しかし、郁太郎だけはまつ先に
賛成した。二派に分れた議論が互に争ひつゞけられたのはいふまでもない。一方この頃
各國の聯合艦隊は先の長門藩砲撃の罪をならして下關におしかけた。講和か戦争か、一
藩は上を下への大さわぎである。うつかりすれば日本の國としてもまことにあぶないこ
ころであつた。この間にあつて郁太郎が百方努力したことはいふまでもなく、そのかひ
あつて大事はことなくおさまつたが、またくさわぎがもち上つた。といふのは、幕府
が先に兵を率ゐて上京し、おそれ多くも宮門にせまつて兵火を開いた罪を理由に、には
かに攻めたてゝ來たからである。ぐづぐづすれば大兵をさし向け、うち亡してしまふと
いきまき、幕府はおそろしく強ごしである。事は一藩の浮沈にかゝはる一大事と、又し
ても藩論は二つに分れてはげしく相争ふことゝなつた。

「われ等は、たとへ幕府が何といはうとも、皇室に對し奉りまごころこめてお盡ししよ
うと決してゐるのだから、かまふことはない。」

と強く正義を言ひ張る者と、

「これはこのまゝではすまされぬ、事は一藩の重大事、とにかく幕府の命のまゝに従は
う。」

とて、これに反對し俗論をいひ張る者がある。尊皇の心のあつた郁太郎がむやみに幕府
に従ふはずなく、井上聞多と力を合せて強く正義を説いた。それがために反對派からは
聞多とともに目の上のこぶとにらまれ、命もあぶなかつた。聞多が家へ歸る途中やみうちに
あつたのはこの頃のこと、母の慈愛と郁太郎の友情こもつた手あつた手術とによつ
て、やうやく命をとりとめたのは有名な話である。

聞多が闇討にあつてからは、正義派の勢もやゝ衰へるやうに見えたが、郁太郎はいよ
く心を固くし、奇兵隊長高杉晋作等と力を合せて反對派をしりぞけるために力を盡し
た。或は長文の意見書を藩主にさし出し、或は一藩の者を説きふせるために堂々の論を
はいた。しかし、争ひは日につのるばかり、つひに幾度か兵火を交へて、やうやく反對
派をおさへた。かくて藩論は一に歸し、いよく幕府を討つはかりごとがめぐらされる
やうになつた。

郁太郎と同藩の志士品川彌二郎とは先の京都の戦以來の親しい間柄であつた。彌二郎は、いつも郁太郎と手を握り肩をたゝいて國事を語り合ひ、郁太郎から得意の西洋兵學をきくのを何より楽しみにしてゐた。或日彌二郎は郁太郎に向かつて松下村塾（しやうかそんじゆく）の昔を語り、しみじみ恩師吉田松陰の思ひ出にふけるのであつた。郁太郎は靜にきいてゐたが、「お互に日本の國に生まれたものは、先生の如くいつでも大君のために命をすてる覺悟をもつことだ。」

と力強く言つた。彼の平素の決心の程を知ることが出来る。

その後、間もなく遊撃隊本陣で病にかゝり、二月堂の梅も散りはて瑠璃光寺（るりくわうじ）の五重の塔が春霞につつまれるのごかな三月の十二日、惜しくも二十八歳を一期（いち）としてこの世を去つた。これ實にあと三年で明治維新の幕が切つて落されようといふ時であつた。

明治三十一年七月、生前の勳功を賞せられ特に從四位を追贈（ついでん）せられた。赤坂矢橋家に生れた縁で、同地妙法寺に墓がある。昭和十三年三月、揖斐郡豊木村大字西方の邸趾にその顯彰碑が建てられた。

七、西山謙之助

(一)

謙之助は今日も机に向つて書物に読みふけてゐたが、ふと眼をはなして庭先を見つめながらじつと考へこんだ。

この頃のあわたゞしい世の中の動きは、こゝ東美濃の片田舎、久々利村（くぐり）にまでもひびいてきてゐた。

皇國（みくに）の正しい姿を考へる人々によつて、尊皇（そんのう）の論がとなへられ、それは枯野につけられた火のやうに日本中に燃え上つてゐた。その上、我が國に迫つて來た外國船を撃ちはらつて、祖國を守りつゞけようとする攘夷（じやうい）の論が、これまた嵐のやうにまき起つてきた。

それらの考へは、次第に、國論を統一して外敵に當らねばならぬために徳川幕府を倒し、天皇の御親政を仰いで新しく日本を建て直さうとするところまで進んで來た。

幕府は、かうした論の最もはげしい長州藩を征伐した。一度では満足せず、此度は將軍家茂が自ら軍をひきゐ、再び長州へ進んでゐるといふありさまである。一體日本はこの後どう成行くであらうか。

謙之助は、庭の一點を見つめたまゝ身動きもしなかつた。

(二)

謙之助は十七・八歳の頃から國學を學び、早くから尊皇愛國の心に燃えてゐた。そしてそれは又、幕府に對するはげしいいきどほりとなつて彼をわき立たせた。

「もはや自分も二十二歳を越えた、この田舎にじつとして埋もれてゐる時ではない。更に一段と學問・武藝を練りきたへ、國家のために働くことこそ、若い自分たちの進むべき道である。」

つひに彼は、江戸へ出て自分の志を果す決心をした。

思ふこと成るもならぬもののふの

かくてむなしくやまんものは

「自分の思ふことが成しとげられるかどうかはわからぬが、それにしても武士たるものが、かうしてむだに一生を過してよいものか」といふ決意の歌一首をかべに書残して家を出た。



それは、第二次長州征伐の軍が西へ西へと進んでゐる慶應二年の春で、消え残りの雪を足どりも軽く東へと向つた。我が家の方を見返りながらも、書残した歌が幾度となく口の中できりかへされた。

江戸に出てからは、その頃有名な劍士であつた齋藤彌九郎について劍道を練り、又、これも有名な

國學者であつた平田鐵胤について國學を學んだ。それにつれて彼の尊皇愛國のこゝろは益々高まつて行つた。

尙義と名をあらためたのも、この頃であつた。

(三)

その間にも世の中の動きははげしかつた。

幕府はつひに大政を朝廷にかへし奉つた。しかし、長い間つゞいた徳川幕府であるから、その家臣中にはこれを不平に思ひ、將軍を盛り立て、武家政治を繼がせようとする者もなかく多かつた。

時に薩摩藩士西郷隆盛等は、あくまで幕府方を討つてしまはなければ、眞に天皇の御親政にはならないといふ考へで、同志の人々をひそかに江戸の薩摩邸に集めさせた。

謙之助も勇み立つてかけつけた一人であつた。やがて薩摩邸の志士たちは、三手にわかれ、一隊は江戸にとゞまり、一隊は下野で、一隊は相模で、共に倒幕の軍を起すことになつた。

謙之助は竹内啓を隊長とする部隊に加はり、江戸を出發して下野に向かふことになつた。彼は、生きて再び歸れぬものと覺悟をきめ、その前夜父母兄弟に別れの遺書をした

ゝめて勇んで出發した。隊は下野の岩船山に立てこもらうとして先づ出流まで進んだ。

この時、隊長は栃木地方を治める足利藩の陣屋に使を出し、軍用金を出させた。栃木陣屋では、栃木の町中では戦を起さぬといふ約束のもとに、使の者に軍用金の一部を渡したのであつた。

ところが、早くもそれが幕府方に知れて、關八州の取締役澁谷和四郎が「それつ。」とかけつけて來た。そしてらんぼうにもいきなり竹内隊に砲撃を加へた。そこで隊士の幾人か傷つきたふされた。危く逃れた二三の者がはせ歸つて急を告げたので、竹内隊長は謙之助を使として談判させようとした。

謙之助はたゞ一人の部下をつれて栃木陣屋へ向かつた。しかしこの時は、もう澁谷方では戦の用意をさへして待ちかまへてゐたのであつたが、謙之助は何も知るはずがない。行つて見ると、陣屋の門は固くござされ、中ではかゞり火をあか／＼とたき、大勢の兵士がざわめいてゐる。

さては——と謙之助も氣をひきしめた。そして、門前の橋の上から大聲で呼ばはつた。すると中から一人の兵士があらはれた。謙之助が面會を申込むと、その兵士は中へ

はいつて行つたが、それきり返事はない。中では面會を許すといふ者、撃ちはらへといふ者、互に議論し合つてゐたのである。

鎌のやうな月が冷たく光つてゐる。謙之助は橋上に立つてじつと待つてゐたが、やがて月を仰いで朗々と詩を吟じた。

しばらくして門は音もなくあけられた。中から大聲で謙之助を呼んでゐる。謙之助は一步步をふみしめつゝ中へ進み入つた。

五六歩ふみ入ると、突然大地をふるはして大砲の音がひびき渡つた。それを合圖に、物かげに身をひそめてゐた兵士たちがバラ／＼と立ちあらはれて、謙之助に立向つて來た。

だまされた——と謙之助は立ち止つた。そして

「卑怯者。」

と叫んで刀を抜くが早いか、先頭の二・三名を斬りたふした。この勢に敵はちよつと尻ごみして立ち止つたが、大勢の力をたのみ切尖をそろへておし寄せてきた。

鐵砲も、一せいに火ぶたをきつた。謙之助の刀はひらめき、幾人か悲鳴をあげてたふ

れた。

しかし何しろ敵は大勢である。

彈丸もあられのやうに飛んで來た。

つひに謙之助の右手にあたつた。つゞいて第二彈は彼の腰のあたりをつらぬいた。さすがの彼もばたりとその場にたふれる、敵はたちまち折重なつて首をとつた。

慶應三年十二月十一日の夜で、謙之助は二十三歳の青年であつた。

(四)

謙之助の忠義な志は、彼が出發の前夜、父母に書残した遺書ににじみ出てゐる。それには、

「二十三年の恩がへしもせぬ不孝な罪は申しわけなく思ひますが、しかし自分は、五年の年月はへだつてゐても、かの楠公父子と同じ心で、今や皇國のために一命をさげるのです。」

と述べて、その心を次のやうに歌つてゐる。

いほとせと年はへだてご梓弓あづま

そのなき數に我もいらなむ

その上、律義リチギな彼は、今回の出陣にあたつて武具を買ふため、友人に金を借りたことを一々しるして、誰々にいくらお返し下さいと頼んだり、又、弟瀧三郎たきが大きくなたならば、平田先生の弟子にさせて、私の志を繼いで皇國のために盡くさせて下さるやうにと願つたり、後々の事までもこまかく書きつゞつてゐる。

今、この遺書を読むとき、ほの暗いともし火の下で、父母兄弟の心中を思ひながらも、敢へて國事におもむかうと、涙をおさへて筆をとつた謙之助の姿がしのばれて、その純忠の心に打たれるのである。

謙之助の死後、間もなく、彼等の志したとほり、幕府は倒れ 明治天皇の大御代となつた。

明治十六年、謙之助の兄に祭糞料さいいしを賜ひ、次いで二十三年、靖國神社に合祀がうしせられた。更に明治三十六年には、特に正五位を贈らせられた。この重なる光榮に、謙之助の忠魂も感激の涙にむせんでゐることであらう。

八、小原鐵心

(一)

時は慶應四年(明治元年)正月十日、大垣前藩主戸田左門氏正さもんうぢただの邸で會議が開かれ盛に議論がたゞかはされてゐた。藩主氏共うぢたかを始めならば重臣の面々が、「皇政復古の幕まくが切つて落された今日、一體大垣藩はどうしたらよいのか。」といふ大きな問題にぶつかつて眞剣に意見をかはしてゐるのである。

此の會議の席上、小原鐵心は昨年末から今春にかけての京都のやうす、鳥羽・伏見とばの戦のありさま、大阪に出した大垣藩士が、鳥羽の戦に加はつたこと等についてこまぐと意見を述べ、

「事がかやうにまで切迫せつぱくしたからには、直ぐ藩をあげて歸順し、勤皇の道を誤らないやうにすることが第一の急務である。」と力強く主張した。

しかし、譜代大名(もごから徳川の家臣)である大垣藩の大勢は、ごこまでも徳川家を支へ援けることを考へてゐたので、此の席上、誰一人として直ちに鐵心の意見に賛成する者はなかつた。重臣の中には、



小原鐵心

「三河以來の恩義のある徳川家が滅びようとするのを黙つて見てゐるのは、舊幕臣としての本分にそむくものである。」

「朝廷に對し奉つては、徳川家としてもそむく心はもとより持つてゐない。只京都に居た一・二藩の者の暴行が、もごになつたのであつて、決して徳川家自身が此の度の戦をひき起したのではない。」と説く者もある。また、

といふやうな情誼論じやうぎろんにひかれて大義を誤る者、或はその何れにもつかないで様子をかゞつてゐる者等が多く、議論がまち／＼でごうきめたらよいかほとんど見當けんとうがつかぬありさまであつた。事の次第によつては、たゞ大垣藩の安危あんきの分れるところだけではなく、國家の前途に大きな影響えいさうを及ぼすことになるのである。

鐵心は此の中に立つて、ごこまでも勤皇の大義を説き、
「天に二つの日がなく、地に二人の君がない。」

と、古今の例をひいてわかり易くさとし、實に前後四時間にわたつて熱烈に主張した。

此の熱のある正しい議論に對しては、さすがに一同の者も心をうたれ、静まりかへつて聞き入つた。この時、内藤忠行・高岡夢堂の兩名が起ち上つて鐵心の意見に賛成したので、やうやく彼の主張が認められさうになつた。前藩主左門は、鐵心の説を聞いて之を喜び、先程からその主張を認めようと思ひそかに考へてゐたので、こゝで一同の者にはかつた。そしてつひに鐵心の正しい説がとほされたのであつた。

(二)

このやうに、大垣藩が他に先んじて正しい道に進むやうになつたについては、鐵心の一方ならぬ苦心にもとづくことが多かつた。

是より先、慶應三年十月に徳川慶喜よしよが大政をおかへし申して、維新の大業は着々とのへられ、新政府は廣く人材を集めてもろゝの政治にあづからせた。鐵心もまた選ばれて京都に入り、この正月始に參與さんよの職に任せられてゐた。

たまゝ鳥羽の戦が起つた。時に、鐵心の子兵部ひやうぶは大垣藩の兵をひきゐて大阪にあつたが、徳川方として鳥羽街道の先驅せんくを命せられた。彼は直ちに兵を集めて正月三日には淀よどに着いた。鐵心はこの知らせを聞いて大いに驚き、すぐに同志の菱田海鷗ひしだかいおうを兵部の陣中につかはし、「尊皇の大義を説いて、もし聞かなかつたら首をはねよ。」とまでいひふくめた。しかし戦はずでに開かれて、砲聲も盛に聞えて來た。藩中の兵には血氣にはやる者が多く、兵部の力では何ともすることが出来ぬありさまに立ち至つてゐたので、海鷗の努力はむなしくなつてしまつた。鐵心の心勞は一そう甚だしく、四日再び海鷗を兵部の下につかはしたが、海鷗は途中で捕へられて、その目的を達することが出来なかつた。そこで鐵心は五日朝三たび兵部に書面をやり、眞心をこめて臣子の道を説いた。け

れども時既に遅く、大垣藩兵は官軍に發砲して、つひに「賊軍」の汚名を受けるに至り鐵心の苦心は全く水の泡あはとなつてしまつた。

行きがかりとはいひながら、今や父と子が互に敵味方となり、その上更に世の人々の非難ひなんの言葉さへも聞くに至つた。鐵心の心は如何ばかりであつたであらうか。

更に氣がかりなのは大垣藩全體の動きである。もしも藩主までが進むべき道を誤つたならば、それこそ再び取り返すことの出来ない結果となることはいふまでもない。鐵心はこの點を非常に心配して、朝廷に對してごこまでも自分の決心を申し上げて、急いで國に歸り、早速重臣さつそくたちを集めて會議を開き、大垣藩の向ふところを定めたのであつた。

一藩の反對を押し切り、諸藩に先んじて朝廷に従ひ奉るやうに導いた鐵心の偉大な功績は、いつの世までも光り輝くものである。

(三)

鐵心は本名を忠寛ただひろ、幼い名を本太郎といつた。鐵心はその號である。文化十四年十一

月三日に生れた。先祖以來代々大垣藩に仕へて、百五十石をいたゞいてゐる名家であつた。天保十三年、二十六歳で父のあとをついで藩主に仕へ、主として會計の仕事にたづさはつた。

當時の大垣藩は天保飢饉のあとをうけて、藩内は貧しく、その上多年揖斐川の出水で堤防が切れたりしたために、人々は非常に苦しみ、生活もなか／＼ゆたかではなかつた。

藩主氏正は何とかして再びよい藩に立てなほさうとして、先づおごりを禁じて儉約を奨めた。しかし、なか／＼効果があがらず、財政はいよ／＼行きづまるばかりであつた。そこで氏正は、一そう力を用ひて、藩の政を改め、人民をゆたかにしようとし、鐵心を召してその重大な仕事をなすとげるやうに命じた。

命をうけた鐵心は、日夜力を盡くして藩政の改革につとめ、租税取立の方法を考へたり、むだの費用を節約したりして、少しでも改革に役立つことは、すべて必ず研究を重ねて實行した。他の諸藩に於て行はれてゐることなども實地について見學したり、書物によつてしらべたりして、十分にその効果をあげることに努力した。

藩主はよく彼を信頼して事に當らせたので、數年もたぬうちに今までの衰へてゐた藩の財政は立ちなほり、倉には米が満ちて、人民もその生活に安んずるやうになつた。

安政二年、藩主は鐵心の功績をたゞへて三百五十石を増し與へたが、鐵心は固くことはつて、これを私用にせず、すべてを藩のために用ひた。幕府が大垣藩の改革についてこれを賞し、藩主を江戸城に呼んでその功をたゞへたのも、實に鐵心の努力の賜といはなければならぬ。

勤皇家鐵心は一面、かやうに藩政の政革についてもまた大きな功績をのこしたのである。

(四)

明治維新の後、藩籍の奉還が行はれ、舊大垣藩主は新に知藩事に任せられ、鐵心は大垣藩大參事となつて更に新政にあづかつた。

明治五年四月病にかゝり、年五十六歳でなくなつた。

鐵心の性質は極めてさつぱりしてゐて、特に時勢を見抜く力がすぐれてゐた。菱田海

鷗は鐵心を秋の夜空に輝いてゐる大きな月にたどへ、おはとりせつそう 鴻雪爪は彼を「廣い天下に唯一人の友だ」といつた。これによつても鐵心の人物の一端がうかゞはれよう。

平生朋友との交りがすこぶる多く、やまがせいがん 梁川星巖・さくましましろうさん 佐久間象山・おのこさん 小野湖山等當時の名高い志士と深く交際してゐた。特に彼の勤皇の精神は星巖の指導によることが大きかつたといふ。常に梅の花を愛し、老樹數百株をやしき 邸に植ゑて心をなぐさめた。暇があるひま と客を集めて詩をよんだり、文を論じたりして楽しんでゐた。

明治二十年一月、明治天皇が御巡幸遊ばされた時、特に正五位を贈られ、次て三十三年五月其の子適ただす（兵部）に男爵を授けられたことは鐵心の不朽の功績を物語るものである。

昭和十六年七月十八日印
昭和十六年七月二十一日發行

郷土の勤皇家

定價金貳拾錢

著作者 岐阜縣教育會
右代表者 阿部榮之助

發行兼印刷者 谷口正太郎

印刷所 合名 秀文社

名古屋市中區新榮町三丁目

發行所 正文館書店

電話中局四二七三番
振替名古屋一四五番

當店發行の圖書は澤山製本準備あり賣捌店に品切の節は直接發行所へ御申込を乞ふ

不許
複製

終

